



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3807号 2017.7.30 発行

発達障害、体験基に講演活動 理解深める本も出版



失敗談も交えながら発達障害について語る難波寿和さん。「昼の休憩はいつも1人。人と一緒にいるとしゃべってしまうから、頭がクールダウンできないんです」＝加古川市加古川町備後、加古川市人権文化センター
自身の体験を基に書いた「14歳からの発達障害サバイバルブック」

兵庫教育大大学院修了の臨床発達心理士で、発達障害のある難波寿和（ひさかず）さん（35）＝松江市＝が発達障害の当事者であり、支援者でもある立場を生かして療育相談や講演活動に取り組んでいる。障害者と同じ目線で特性や接し方のこつなどを紹介する本も出版。このほど兵庫県加古川市であった講演会で「親や周りの人たちは結論を急がず、時間をかけて話を聞き、とことん寄り添ってほしい」と訴えた。（三浦拓也）

難波さんは岡山県出身で、同大大学院では障害児教育を専攻。人とコミュニケーションをとるのが苦手など、自分が発達障害かもしれないと以前から感じていたが、実際に病院を訪れたのは5年前。「普通」に振る舞い続けることを負担に感じて体調を崩し、自閉症と注意欠陥多動性障害（ADHD）、社会不安障害、うつ病と診断された。

「もっと早く受診すべきだったと後悔した」と難波さん。その後、発達障害を公表して活動を本格化させ、全国で講演などを続けている。

昨年出版した「14歳からの発達障害サバイバルブック」（学苑社）は体験を基に発達障害の人に日常起こりやすい問題などをイラスト付きで紹介。例えば、誤字・脱字対策は「指でなぞって確認」「何度も小声で読み返す」▽スケジュール管理は「手帳に予定を書く」「終わったらずつ消していく」▽時間の管理は「タイマーを使う」ーなど具体例を挙げる。

加古川市の講演会は、発達障害のある子とその親らでつくる「ひだまりの会」（同市）が開催。約40人を前に、難波さんは「視覚優位」で目から入る情報が処理しやすいという特性を説明。耳から入る曖昧な指示（「ちょっといい？」「あとで」など）は理解しづらく、仕事では用件を紙に書いてもらったり、メールで文字として残してもらったりして工夫していることを明かした。

難波さんは「障害者差別解消法は障害者への『合理的配慮』を求めているが、自分から申し出ないとなかなか希望が通らないのが現状。何に困っているかを伝え、障害者自身が

神戸新聞 2017年7月29日



権利の幅を広げていかないと変わらない」と力を込めた。

「14歳からー」はA5判194ページ。1944円。学苑社TEL03・3263・3817

障害者雇用率 なお足踏み



河北新報 2017年7月29日

県内の民間企業で働く障害者が、低賃金や職場の人間関係などへの不満を理由に離職するケースが相次いでいる。2016年の障害者雇用率は1.88%で、全国40位にとどまった。14、15年と2年続いた全国最下位は免れたが、依然として国が求める法定率の2.0%を下回っている。

県は今年1月、県内の障害者4000人を対象にアンケートを実施（回収率47.8%）。最優先で取り組んでほしい施策（複数回答）に「働

ける場の確保」を選んだ人は28.5%で、「年金等の充実」（43.2%）に次いで多かった。

「働ける場」を挙げた人のうち、企業などでの就業年数が「5年未満」は52.8%で、「5年以上」の44.7%を上回った。仕事の悩み（複数回答）は「低賃金・低工賃」（25.8%）、「勤務体制」（24.2%）、「人間関係」（20.8%）の順となっている。

県の別の調査では、15年度に社会福祉法人やNPOが運営する就労移行支援事業所から企業に173人が就職した一方、離職者も80人に上った。県障害福祉課は「就労意欲が高い人ほど能力に合わない仕事への不満や、周囲から気を使われることに孤独を感じやすい」と分析する。

企業の採用意欲は徐々に上向いているが、4～5月にやめるケースが多いという。障害者雇用率は厚生労働省が6月1日時点の実数を集計する。法定率は18年度に2.2%、20年度末までに2.3%に引き上げられるが、同課は「ミスマッチをなくさなければ達成は難しい」と話す。

雇用情勢を改善しようと、県は15年度から幹部による企業訪問や合同面接会を開始。本年度は就労移行支援事業所と民間企業の交流を強化し、担当者間の意見交換の場や障害者個人の特性を企業側に説明する機会を設けている。

宮城障害者職業センター（仙台市）の岩佐純所長は「企業も資源と労力を費やして採用しており、定着が図れない現状は大きな損失だ。行政が企業の現場に入り込み、双方が働きやすい環境の整備や理解者を増やすなど地道な努力が欠かせない」と指摘する。

地域包括ケアのまちづくり実現を 山陽新聞社会事業団70周年シンポ



山陽新聞 2017年7月28日

高齢者らが住み慣れた地域で暮らし続けられる社会の実現を目指して開かれた「地域包括ケアのまちづくりシンポジウム」＝山陽新聞社さん太ホール

山陽新聞社会事業団（岡山市北区柳町、松田正己理事長）は28日、同所の山陽新聞社さん太ホールで、高齢者らが住み慣れた地域で暮らし続けられる社会を目指す「地域包括ケアのまちづくり

シンポジウム」を開いた。事業団創立70周年記念事業の一環。

地域包括ケアシステムは、医療や介護、生活支援などを一体的に提供し、高齢者らの自立生活を支援する仕組み。基調講演した医療介護福祉政策研究フォーラム（東京）の中村秀一理事長は、まちづくりの視点から地域包括ケアを考察した。一家庭が病気や障害、貧

困など複数の問題を抱えた場合、総合的な対応が難しい現行制度の問題点などを指摘。「課題解決には地域のつながりを強化する『互助』が重要になる。住民主体の福祉活動は地域再生の軸となり得る」と述べた。

続いて倉敷市保健福祉局の吉田昌司参与、県医師会の江澤和彦理事、小規模多機能ホーム「ぶどうの家」＝倉敷市＝の津田由起子代表が意見交換した。

「地域課題の解決には住民ニーズを取りまとめ、行政とのパイプ役になるコーディネーターの存在が欠かせない」「共助である社会保険制度は自助があって初めて成立する。一人一人の健康管理が大切。肥満予防や骨粗しょう症対策に地域を挙げて取り組むべきだ」「地域の人々は要介護、認知症の人を含めてみんな仲間。障害者も高齢者も元気な人も互いに支え合える、全員主役の地域社会を目指したい」などと話し合った。

約100人が聴いた。

山陽新聞社会事業団は1948年に発足し、医療・福祉活動の支援など行ってきた。

“同じ尊い命” 訴え 相模原事件1年、大分市でシンポ

大分合同新聞 2017年7月30日
障害のある人への差別などについて討議するパネラー



相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で起きた殺傷事件から1年。事件の背景にある障害者への差別意識や、誰もが安心して暮らせる社会について考えるシンポジウムが29日、大分市内であった。重度障害がある人は意見発表で、障害を理由に差別を受けた体験を明かし、「同じ地域で生きる尊い命として、きちんと向き合う心のゆとりを持ってほしい」などと訴えた。

意見発表に臨んだ宮西君代さん（大分市）は脳性まひのため手足の自由が利かず、車椅子で生活する。殺傷事件には「犯人、犯行を称賛するネット上の書き込み、そして被害者の名前が発表されなかったことに怒りを感じた」と述べた。

障害年金などを受け取っていることから「税金泥棒」といった言葉を浴びせられ、「社会の厄介者として扱われてきた」と思いを吐露。「障害のある人は役に立たない存在、という差別意識は今なお根強い。障害者差別解消法は施行されたが、その裏で一人一人の内面は変わることなく、爆発したのが今回の事件だ」と強調した。

筋ジストロフィーを発症し、西別府病院（別府市）に入院する大林正孝さんは「どんなに障害が重くても、夢に向かって命を輝かせている。精いっぱい生きて、遊んで、学んで、働いていることを知ってほしい」とのメッセージを寄せた。

パネル討議で、障害者支援に携わる寄村仁子（とよこ）さん（宇佐市）は「障害がある人も、誰かとつながり生きることを強く願っている。言葉を発することができなくても、その人なりに生きていくことだけは伝えたい」と語った。障害者の権利擁護に詳しい徳田靖之弁護士（別府市）は「（障害者を）生きるに値する、値しないと選別する考え方と闘う意識を持つことが大事だ」と呼び掛けた。

シンポジウムは、障害者や支援者らでつくる「だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会」などの主催。約120人が参加した。今後もシンポを開き、社会の関心を高めていく考え。

石巻市の牡鹿半島を主な舞台にした芸術と音楽、食の総合祭「リボンアート・フェスティバル（RAF）2017」で、空きビルだった同市門脇町の元病院施設がスタッフらの宿泊拠点「リボンアート・ハウス」として活用されている。祭り終了後は福祉施設に生まれ変わる予定で、RAFがテーマに掲げる「再生」や「循環」を実践する場になっている。

カラフルな絵が宿泊者を出迎えるリボンアート・ハウスの玄関



建物は鉄筋コンクリート一部鉄骨5階、延べ床面積3785平方メートル。2～5階の病室だった部屋で、スタッフやボランティアがすのこやベッドに布団を敷いて寝泊まりする。1階リハビリテーション室は現代アートの展示会場に改装した。

開幕前日の21日にオープンし、1日平均約70人が宿泊。実行委員長で音楽プロデューサーの小林武史さん（新庄市出身）をはじめアーティストやシェフも泊まり、スタッフらと交流を深めている。

建物は東日本大震災で1階天井近くまで浸水した旧石巻港湾病院。一部を修繕して診療を続け、2015年に同市大街道西に移転新築した。建物は使われなくなり、スタッフらの宿泊場所を探していたRAF実行委が活用を考えた。

11月以降は市内の社会福祉法人が障害者の就労支援施設を開所する計画。壁や扉にはRAF仕様で「命」をテーマにしたカラフルな絵などが描かれ、一部は福祉施設になっても引き継ぐ方向で調整しているという。

一般の宿泊は受け付けていないが、ボランティア組織「こじか隊」に参加すれば利用できる。無料で、ビュッフェ形式の夕・朝食が出る。シャワー室と洗濯機も利用できる。

運営事務局スタッフの鈴木茜さん（32）は「ハウスは人が関わることで変化する未完成のアート作品のような場所。ボランティアには同じ釜の飯を食べながら、RAFの世界観を楽しんでもらいたい」と話す。

原発避難に福祉タクシー

読売新聞 2017年07月30日

◇県、中国5県の協会と協定...鳥取も

島根、鳥取両県は、中国電力島根原子力発電所（松江市鹿島町）の事故による避難時に、障害者や高齢者を福祉タクシーで輸送するための協定を、中国5県のタクシー協会と結んだ。

協定書によると、両県は、作業中の年間被曝線量が1ミリシーベルトを超えないと想定される場合、協会に車いすやストレッチャーのまま乗車できる福祉タクシーでの輸送を要請できる。

島根県の推計では、原発30キロ圏内の約1万6000人が避難に福祉車両が必要とされる。県内の社会福祉施設が所有する約1600台では足りないため、福祉タクシー416台を保有する同協会との協定締結に至った。

両県は輸送費用などを負担するほか、協会員に個人線量計や防護服などを無償貸与し、放射線などに関する研修も実施する。県原子力防災対策室は「できるだけ多くの福祉車両を確保していきたい」としている。

夜の街に帰さない 貧困、虐待被害の少女ら支援 「自立まで」シェルター開設

東京新聞 2017年7月30日

貧困や虐待、性被害などに直面した十～二十代の女性を中長期的に受け入れ、自立できるまで後押しする全国でも珍しい民間のシェルターが東京都練馬区に開設された。困難を抱えた少女らを支援してきたNPO法人「BOND（ボンド）プロジェクト」（東京）が運営。空き家を活用してスタッフが共に暮らし、一時的な保護にとどまらず、少女らを支える。（神田要一）



入居する女性たちが使うキッチンで食器を準備する「BONDプロジェクト」のスタッフら＝東京都練馬区で（由木直子撮影）

シェルターは二階建ての住宅で「ボンドのイエ」と名付けられ二十七日にオープン。二階には個室が二つ。常に二人が最長一年程度、生活できる。

一階の部屋は短期間の入所者向けだ。

面談で保護が必要と判断されれば全国から少女らを受け入れ、スタッフが泊まり込みで食事を作る。入居時に「三カ月間」「二十歳になるまで」などと期間を相談し、少女らは月三万円の生活費を負担する。臨床心理士のカウンセリングも予定している。

BONDは渋谷の繁華街で少女らに声を掛け、相談に乗ってきた。一夜を明かす場所を求めて援助交際に走る少女らを前に「今日家に帰れない子が、ほっとできる場所をつくりたい」と、二〇一〇年に女性専用のインターネットカフェを渋谷に開設した。

資金の都合でネットカフェを閉じた後も、事務所に借りたマンションの一角にマットを敷き、少女らを泊めた。「初めは一時保護が目的だった。でも、夜中に電話で相談を受けながら、この子たちを帰せる安全な場所がないことに気づいた」。代表の橘ジュンさん（46）が打ち明ける。

BONDには、虐待や暴力を受けた少女らのSOSが毎月千件超も寄せられる。橘さんは児童相談所などに行くたび、淡々とした職員の対応に違和感があった。公的施設で年齢差のある女性との共同生活を嫌がる少女や、「親を悪者にしたくない」と事実を明かせず、家に戻される少女も珍しくない。

対応に時間がかかると、「少女らは『結局、大人は役に立たない』と思い、夜の街に戻ってしまう」と橘さん。中長期の支援が必要と感じていたところ、社会福祉法人「ベテスタ奉仕女（ほうしじょ）母の家」（練馬区）から、空き家が無償で借りられることになった。

今月に入ってインターネットで支援を呼びかけると二週間で全国から生活用品が寄せられた。橘さんは「周囲の支えが必要なのに公的な支援につながらない子を、時間がかかっても自立できるまで応援したい。あの子たちの実情に制度が合っていくように、声も上げていく」と話している。

問い合わせ、相談はBONDプロジェクト＝メール bond@bondproject.jp＝へ。

<児童養護施設と民間シェルター> 虐待、貧困などを理由に子どもが親から離れて生活する施設は、児童福祉法に基づく児童養護施設がある（2016年10月現在、全国に603カ所、約2万7000人入所）。民間シェルターは、ドメスティックバイオレンスの被害者らを緊急的に避難させるための施設が主流で、子ども向けはまだ少ない。

患者さんの言葉が分からない！…津軽弁、AIで標準語に 弘前大が自動翻訳研究へ、医療現場などでの実用化目指す

産経新聞 2017年7月28日

弘前大は28日、なまりが強く方言の中でも特に難解とされる青森県の津軽弁を、人工知能（AI）で標準語に自動翻訳する研究を東北電力と共同で始めると明らかにした。患者との意思疎通が不可欠な医療現場などでの実用化を目指す。

津軽弁は青森県中西部の方言。単語が短く発音が標準語と大きく異なるため、地元の住民以外にはうまく聞き取れないことも多い。弘前大病院では、県外出身の医師や看護師が

患者の言葉を理解できないケースがあるという。



津軽弁の標準語自動翻訳研究について記者会見する弘前大の柏倉幾郎副学長（右）ら＝28日午後、青森県弘前市

本年度の研究では東北電コールセンターで通話を録音した音声6700件（900時間分）をAIで自動的に文章化し、標準語で要約するシステムの開発を目指す。さらに津軽弁でも特になまりが強いとされる鱒ヶ沢町の住民に協力を依頼し、会話を録音。解読精度の向上や単語と文章のデータベース化を進める。将来的に津軽弁を標準語に翻訳して音声や文字で伝える仕組みをつくる計画だ。

子どもたちがボッチャ大会 東京パラに向け普及を



NHK ニュース 2017年7月29日
パラリンピック競技の一つ、「ボッチャ」に親しんでもらおうと、東京都の特別支援学校などに通う子どもたちが参加するボッチャの大会が開かれています。

この大会は3年後の東京パラリンピックに向けた障害者スポーツの普及を図ろうと開かれ、府中市の会場には都内の特別支援学校や公立の小・中学校に通う子どもたちおよそ150人が参加しました。

ボッチャは的の白いボールに向かって赤と青のボールを転がし、いかに近づけるかを競います。特別支援学校のチームどうしが対戦する学校代表戦では、子どもたちが手で球を投げたり、道具を使って転がしたりして、得点を競い合いました。そして見事なプレーが決まると会場からは大きな歓声が上がっていました。

参加した生徒は「チームのみんなと協力してプレーし、勝つことができてよかったです」と話していました。

優勝したチームはことし秋ごろ、東京都の小池知事や都の職員らで作る都庁チームと対戦する予定です。

〈生きる支える 心あわせて〉 100歳になる祖母の介護（上）



中日新聞 2017年7月26日
閉じた日記 続きは私が
週末は家族で食事する酒井さん一家。食欲旺盛なノブエさん（左端）に、ふみこさん（左から2人目）、和代さん（同3人目）、繁汎さんがほほ笑む＝愛知県知立市で

「やられたー」。7月上旬のある朝、愛知県知立市の酒井ふみこさん（46）は、認知症のある祖母ノブエさん（99）の寝室で思わず声を上げた。心地よさそうに眠っているノブエさんを見てほっとして、床にできた水たまりに気付かずに踏んでしまった。夜中、トイレに間に合わず、寝室の床にしてしまったようだ。

足の裏の感触に一瞬、顔をしかめたが、これも慣れっこ。様子を見にきた父繁汎（しげひろ）さん（77）と母和代さん（69）と「布団を汚さんかったから、ええ方やな」と笑い合った。

ノブエさんは日中は母屋で過ごし、夜は離れて眠る。ふみこさんは保育施設で看護師として働き、近くで一人暮らしするが、朝晩は必ず実家に立ち寄る。朝、ノブエさんを起こすのはふみこさんの日課だ。

9月で100歳を迎えるノブエさんに、認知症の兆候が出始めたのは15年ほど前。以来、施設に預けることなく、自宅で仏壇彫刻の仕事をする繁汎さんと、和代さんを中心に、家族が介護し続けている。

この1、2年、ノブエさんは症状が落ち着き、足腰も弱くなり、静かに過ごす日が増えた。今では、おねしょをしても家族にとっては笑い話。しかし、それまでは厳しい毎日だった。

当初は、5分おきに「いま、何時だあ」と聞く程度だったのが、90歳を過ぎたころから、近所の敷地に入って勝手に草をむしるなど周りの迷惑となる行動が日常化。トイレの場所が分からなくなり、あちこちで排せつしては汚れたおむつを引き出しの隅などに隠し、夜中に突然目覚めて寝室の中をかき回すこともあった。

本人は「うっかりしたわー」と言うものの、ひどくなる症状に家族のイライラは募った。とりわけ繁汎さんは、母の変わりようを受け入れるのに時間がかかった。

ノブエさんは長年、自宅で和服を仕立て、近所でも働き者と評判だった。その母を自慢に思ってきただけに、「注意しても分かってくれないとは思えなくて、つい怒鳴っちゃうんだろうな」。

しかし、苦しいのは本人も同じだった。ノブエさんには家族にも読ませずに、何十年にわたって日記をつける習慣があった。しかし、2007年を境に家族が日記帳に向かうノブエさんを見ることはなくなった。

ところが、その2年後、ふみこさんが部屋の掃除をしていたところ、偶然、最後の日記帳を見つけた。開いてみると、認知症が進んでも気丈に振る舞っていたノブエさんが、心の中では自身の認知機能の低下に傷ついてきたことがありありと伝わってきた。

「思い出そうとするが思い出せません」「日記も日付がわからんのでめちゃくちゃ」。06年には、こうつぶられるようになり、最後のページにはこう記されていた。

「丈夫に生んでくれた両親に感謝のきわみだ。これにて日記を書くことをやめます。色々考えると涙が出てきます。ありがとうございました」

日記を閉じたふみこさんは「私が代わりに書こう」と決めた。以来、ノブエさんの生活を日記につづる毎日が始まった。そして、見守る家族の目も優しくなっていた。（添田隆典）

〈生きる支える 心あわせて〉 100歳になる祖母の介護
(下) 中日新聞 2017年7月27日
ノブエさん(右)に話し掛けながら、日記を書くふみこさん=愛知県知立市で

ユーモアの力を借りて

「いつもなら浴室から、『シャンプーどれだ?』と聞いてくるのに、今日は静かだ。怪しい。そっと見に行くと、湯船につかり、その中で頭をすすぐおばあさんがいた。あ〜あ〜」

愛知県知立市の看護師、酒井ふみこさん(46)は、祖母ノブエさん(99)の日常を、日記帳に記している。始めてから今年で8年だ。

日記はもともと、何十年にもわたるノブエさんの習慣だった。



しかし、認知症が進み、2007年に自分ではつけられなくなっていた。その2年後、ふみこさんがたまたま見つけた日記帳から、家族の前では気丈に振る舞いながらも、内心は自身の症状に苦しんでいたことを知り、祖母に代わって書くことを決心した。ふみこさんが日記帳を開いていると、内容は理解できなくてもノブエさんが興味深そうにのぞき込む。

お風呂のことを書いたのは、10年8月。このころから家のあちらこちらで排せつをするなど症状が急に進み、家族の疲労もピークに近かった。それでも、日記にはありのままをユーモアを交えて書いた。

ノブエさんと同居する父繁汎（しげひろ）さん（77）、母和代さん（69）とふみこさんが介護してきたが、カッとなって怒鳴ることもしばしばだった。日記にユーモアを交えたのは、いら立ちを少しでも和らげたかったから。介護でつらくなったときでも、読み返すとノブエさんとの接し方は変わった。

「怒ってばかりいても症状が良くなるわけではないし、おばあさんが悪いわけでもない。だったら、お互いが穏やかでいられる方法を考えよう」と、ふみこさんは話す。

その方法の一つが「張り紙大作戦！」だ。ノブエさんは91歳になったころから毎日下着を替えなくなった。そこで、家族が目をつけたのは、ノブエさんが字を読むのが好きなこと。始めたころの日記にはこうある。

「命令文ではおばあさんの機嫌を損ねかねない。結果、風呂から出た時、目に付く高さに大きな字の張り紙をすることにした。『毎日、風呂から出たら、パンツと靴下は洗濯機に入れてください』。連日効果あり、大成功！」

あきれてしまうようなことをノブエさんがしたときも、家族で知恵を出し合って対処方法を考える。そして、うまくいけば皆で喜ぶ。困ったことがあっても、イライラをそのままノブエさんにぶつけるのではなく、別の方法を探ってきた。

ノブエさんも病気にもならず、介護サービスも使っていない。味覚は薄れ、嫌いなトマトでも食べるようになったが、食欲はいまも旺盛だ。最近の日記にも食事の話題は多い。

「カキフライの写真に手を伸ばし、つかむしぐさ。残念、それは食べられません」

ノブエさんはあと2カ月で満100歳を迎える。それは、家族にとっても「感慨ひとしお」なこと。介護にはつらいこともたくさんある。でも、いろいろなことを乗り越えてきた。だから、心の底から長生きしてほしいと思う。

「次は、最高齢のギネス挑戦やね」。家族そろった食卓に、笑い声が響いた。（添田隆典）

アレルギー疾患を総合診療 藤田保健衛生大にセンター 共同通信 2017年7月29日

藤田保健衛生大（愛知県）は、小児科など六つの診療科が連携してアレルギー疾患の治療や研究にあたる「総合アレルギーセンター」を開設し29日、記念講演会を開いた。NPO法人「アレルギーを考える母の会」の園部まり子代表理事は「『ここに行けば大丈夫』という地域の希望の灯台になってほしい」と期待を寄せた。

センターは、同大学の坂文種報徳会病院（名古屋市）に1日に開設。日本アレルギー学会の認定を受けた同病院の小児科、皮膚科、耳鼻咽喉科、眼科、呼吸器・アレルギー内科、総合アレルギー科の専門医11人が所属する。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

